

国際交流基金助成事業報告書

薬学部 2年次生 N.F

1)はじめに

本研修は、オーストラリアのグリフィス大学において、2024年3月10日から3月17日までの期間に実施された。本研修の主な目的は、オーストラリアの医療制度や文化の違いを理解するとともに、現地での交流や医療機関の見学を通して実践的な英語力および異文化理解を深めることである。

2)渡航前に考えていた自分の目標

私は今回のオーストラリア研修が初めての海外渡航だったため、日本と比較することで多くの学びを得て吸収しようと考えていた。言語、気候、文化など様々な差異がある中で、事前学習を踏まえて具体的な目標を三つ掲げた。

- ① コミュニケーション、価値観、生活習慣などの日本とオーストラリアの文化差異を授業で学ぶだけでなく、日常生活の中で主体的に情報を収集し、自分なりに比較・考察する。
- ② オーストラリアの医療制度について学ぶとともに、病院見学を通して現地の医療現場の実際の運用や医療従事者の役割を理解する。
- ③ 日常的に英語でのコミュニケーションの機会を自ら作り、現地の人々との積極的な交流を通して、実践的な表現力および理解力の向上を図る。

これら三つを達成するために一日一日を価値あるものにできるよう主体的に取り組んだ。

3)その目標は渡航後どうだったか

①目標を達成するために、ホストファミリーとの生活では日本の家庭での過ごし方との違いを意識し、現地の人との交流や授業を通して考え方やコミュニケーションの特徴を見つけることを心がけた。また、観光中に気になったことは写真に撮ったりメモを取ったりして記録した。

日本とオーストラリアの文化の違いで特に印象的だったことは三つある。

一つ目は、オーストラリアの人々が夕方以降の家で過ごす時間を大切にしている点である。私がお世話になった家庭では、基本的に午後6時までは帰宅し、家族で食事をしたり、その日の出来事を話したり、飼っている犬と遊んだりして過ごしていた。多くのスーパーマーケットは午後6時に閉店し、土曜日に訪れたテーマパークも午後5時には閉園していた。それ以降の時間は家に帰って家族と過ごす人が多いようだ。日本では、学校や仕

事、遊びなどで家族団らんの時間が少ない家庭も多いと感じるため、非常に魅力的な文化だと思った。

二つ目は、日本と比べて早寝早起きの生活習慣が根付いている点である。私がお世話になったホストファミリーは、夜9時には就寝し、朝5時から犬の散歩に出かけていた。私は日本では深夜に就寝し、朝7時過ぎに起床する生活をしているため、生活リズムを合わせることに少し苦労した。しかし、朝から外に出て運動するなど、日本ではあまり経験しない生活を送ることができ、貴重な体験となった。なぜこのような生活リズムなのか尋ねたところ、オーストラリアは日差しが強いため、朝の涼しい時間に活動する方が快適だからだということだった。気候の違いが生活習慣に影響している点が興味深いと感じた。

三つ目は、他者との関わり方である。オーストラリアの人々は非常にフレンドリーで、明るい人が多かった。例えば、電車内で私たちが日本人だと知ると、日本のどこが好きかを話してくれたり、知っている日本語を披露してくれたりした。また、現地の人同士では知り合いでなくても積極的に挨拶を交わし、笑顔で会話をしている様子が見られ、日本ではあまり見られない光景で新鮮に感じた。

②オーストラリアの医療制度で日本と比較して特徴的だと感じたのは、「公的と民間の併用」と「受診の流れ」についてである。日本では国民皆保険制度のもと、患者が自由に医療機関を選択できるのに対し、オーストラリアではどのような症状だったとしても、まず GP (General Practitioner) と呼ばれるかかりつけ医を受診し、必要に応じて専門医へ紹介される仕組みが取られている。この制度は、同じ GP を継続して受診するため患者の病歴を把握しやすい点と、効率的に医療が受けられる点が優れていると感じたが、一方で自由度の低さがあると考えた。また、公的医療制度により低額で医療を受けられる点は日本と共通するが、公立病院では手術や診察までの待機時間が長い場合が多く、1年以上待つケースもあるとされている。その解決策として民間医療保険が広く利用されている点が特徴的である。日本では比較的短期間で専門的な医療にアクセスできるため、この待機時間の長さは特に印象に残った。

病院見学を通して特に興味深かったのは、病室にあるペイシェントケアボードと産科の設備である。病室の壁にあるペイシェントケアボードには、患者の名前や担当スタッフ、その日の目標、アレルギー、食事内容などがまとめて記載されており、誰が見てもすぐに患者の状態を把握できるよう工夫されていた。このような情報共有の仕組みによって、多職種で連携しながら患者中心の医療が行われていると感じた。また、産科の病室ではダブルベッドが設置されており、家族と一緒に過ごせる環境が整えられていた点が日本と異なっていた。さらに、水中出産が可能であるなど、出産時の負担を軽減するための工夫も見られた。これらの見学を通して、患者や家族の安心感や快適さを重視した医療について学ぶことができた。



ペイシェントケアボード



産科病棟の病室のベッド

③目標達成のために、ホストマザーとの夕食の時間にその日学んだことを話したり、オーストラリアの観光地について教えてもらったりした。自力で英語を組み立てて話すことには時間がかかったが、毎日継続して英語で会話を行うことで、最終日には初日と比べて聞き取りやすくなり、よりスムーズに会話を進めることができるようになった。また、単語が分からなかったり、一度で聞き取れなかったりした際には、ホストマザーが簡単な表現でゆっくりと話してくれたため、会話を途切れさせることなく続けることができた。伝えたいことを英語で表現できずもどかしさを感じる場面もあったが、あきらめずに会話を続けたことで、研修前と比べて英語に対する抵抗感が軽減されたと感じた。

さらに、ゴールドコーストのショッピングモールやウォーターフロントで買い物をする際には、おすすめの商品や価格について自ら質問することができた。お店の方から、どのような商品を探しているのか、どこから来たのかなどを尋ねられ、会話を楽しみながら実用的な英語表現を学ぶ良い機会となった。

4) ゴールドコーストでの生活、観光

グリフィス大学でお世話になっている間、昼食としてサンドイッチやブドウ、リンゴなどのフルーツ、さらに間食用のポテトチップスなどをホストマザーが用意してくれた。オーストラリアではリンゴをカットせずそのまま食べることが一般的であり、最初は食べるのに苦労したが、こうした違いから日常生活における文化の差異を実感した。

大学の帰りにはトラムを利用して友人とショッピングセンターやスーパーマーケットに行ったり、海へ出かけたりした。食べ物は日本と比べてサイズが大きく、価格も高いと感じた。また、牛乳が取っ手付きのプラスチック容器で約2L単位で販売されている点も印象的であった。夕方の海は非常に美しく、自然の豊かさを感じることもできた。ウォーターフロントでは有名なスイーツを味わい、お土産を購入するなど充実した時間を過ごした。

週末には、ワーナーブラザーズ・ムービーワールドを訪れ、ジェットコースターやショーを楽しんだほか、クーンババの公園では野生のカンガルーを観察した。多くのカンガルーが群れで行動しており、母親の袋に入った子どもを見ることもでき、貴重な体験となった。

これらの体験を通して、オーストラリアの自然や文化に直接触れることで、日本との違いをより具体的に実感することができた。



昼食



サーファーズパラダイスの海とウォーターフロント



トラム



ワーナーブラザーズ・ムービーワールド



カンガルー

5) これからの自分

今回の研修を通して、文化の違いや医療制度の特徴を実際に体験しながら学ぶことで、広い視野を持って知識を吸収することの重要性を実感した。今後は、今回得た知識や経験を日常生活や学習の中で継続的に活かしていきたいと考えている。

具体的には、異なる文化や価値観に対して主体的に関心を持ち、自分なりに比較・考察する姿勢を大切にしていきたい。また、オーストラリアの医療制度や患者中心の医療の在り方から理解を深めることができた経験を活かし、将来医療に関わる者として多角的な視点を持てるよう努めたい。さらに、英語でのコミュニケーションに対する抵抗感が軽減された経験を活かし、今後も積極的に英語を使用する機会を増やし、実践的な英語力の向上を目指したい。

今回の研修で学んだ主体的に行動する姿勢と広い視野を持って物事を捉える意識を忘れず、今後の学びに繋げていきたい。